

Title	物語を読む：英語購読における役割と効果
Author(s)	島田, 桂子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-5 : 2-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2367
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

物語を読む―英語講読における役割と効果

島田 桂子

1. 英語教育における多読指導の意義

日本の学校の英語教育において、私たちは、「英語を読む」読み方は教わったものの、「英語で読む」読み方は、教わってこなかったのではないか。高校時代、長期休暇の課題として読み物が課されることもあったが、休み明けの試験は、本の内容について問うものではなく、単語やイディオムばかりを書かせる問題が出されて、面喰った覚えがある。英語はいつまでも取り組むべき学習対象であって、英語を道具として、生きた読みを楽しむということを教えてくれる先生はいなかったのである。そのせいで、日本の多くの大学生は、長い英文を見るとたちまちアレルギー反応を起こす。

しかし、昨今、精読のみではなく、速読、多読教育に力を入れる試みが行われてきている。というのも、多読指導を英語教育に導入することによって、読解速度だけでなく、リスニング力、語彙力、さらに、ライティング力を向上させることができることを、多くの英語教育者や研究者たちが報告しているのである。英語を日本語に訳すのをやめ、英語をそのまま、意味のかたまりごとに読む訓練を積むことによって、聞いてはすぐ消えてしまう早い速度の英文も頭に入っていくようになる。語彙の習得には、理解が必要であるが、未知の単語の意味を文脈から推測し、文の中でその生きた活用法を確認することによって、より定着度が増す。多くの英文に出会った分だけ、英文の自然な形を書くこともできるようになるのかもしれない。そして、もっとも興味深い効果は、速読指導を受けた生徒たちの英語に対する態度の変化である。その一例を挙げれば、大阪府三国丘高等学校でペーパーバック・クラブによる多読指導を受けた平成2年度入学の生徒のうち、入会時に英語が嫌いだと答えた生徒の数は10名だったのに対し、卒業時には2名に減り、英語が好きと答えた生徒が増えたことが報告されている。多読の効果

が益々多く示される中、英語教育に多読指導を導入する意義は大きい。では、多読の効果的指導とはどのようなものなのか、以下に見ていくことにする。

2. 多読における物語の効用

まず、多読のテキストとして何を読むべきか。外国語を身につけるのに最も効果的な方法は、その言語が使われている社会の中で直接その文化と言語に浸ることであると思われるが、母国にいながら、外国語による「言語的小風土」を作り出すことができるのである。それは、小説をはじめとする物語を読むことである。物語の世界は、それ自体が小さな社会であり、その社会に入り込むことによって、学習者は外国語の言語環境の中に身を置くことになるのである。

物語の筋は、読者を惹きつけ、読者の好奇心、探究心、冒険心を満たしてくれるものである。英語で書かれたものであっても、物語に引き込まれて行くうちに、学習者は次に何が起こるのかを予測できるようになっていく。そうなれば、学習者は、英語という言語を「学習対象」ではなく、物語の筋をつかむための「手段」として捉える段階に進むことができるのである。

また、推理や読み込みを必要とする読書においては、未知の単語の意味も文脈の中から捉えやすい。物語の中で重要な単語であれば、繰り返し出てくるので、読み進めながら多くの語彙を身につけることが可能となる。会話部分の多い現代小説からは、会話に使える貴重な語彙を汲み取ることができるだろう。

しかし、物語を読むことの最大の効果は、物語が学習者を楽しませ、もっと先を読みたいというモチベーションを与えることである。ロンブ・カトー氏が指摘しているように、優れた文体家による本格的な文学作品には、それが書かれた国語全体が内包されているものである。そのような文学

作品は美しく、文法的にも正しく構築された文章を提供してくれるので、理想はネイティブのために書かれた原書に触れることであるが、難解すぎて楽しめないようでは、多読学習の目的は果たせない。そのため、初級の学習者には言語学習者用に改作された文学作品や、児童向けの本が有用である。また、日本の小説の英語訳は、学習者が物語の背景や文化的知識を持っているため、理解しやすい優秀な教材として見直されてきている。

3. 多読指導の実践

エディンバラ大学多読プロジェクトの普及によって、イギリスを中心に多くの国々で多読プログラムの導入と持続の方法論が紹介され、実践されつつある。日本では、酒井邦秀氏を中心としたSSS英語学習法研究会があるが、日本の大学の授業における多読指導の実践はまだまだ発展途上にあるようだ。ここでは、多読指導を大学の授業で行う場合、どのようなものになるのか、リチャード・デイとジュリアン・バンフォードのメソッドによる大まかな形を見てみることにする。

まず、読みの活動は、多読という性質上、授業外の課題として行うことが求められるわけだが、授業中にも読みの時間が与えられることが多読指導において重要な事柄であるとされている。授業中に読む時間を与えられることによって、リーディングの価値が示され、学生はその活動に評価を与えるからである。したがって、学生は授業中に、自分の学習レベルに合った本を選択し、自分のペースで本を読むことになる。ある程度のスピードで、楽しんで読むためには、自分のレベルより一段階下のレベルの本を選ぶように指導する。クラスには、魅力があって面白く、適切なレベルと適切な長さのリーディング用教材が用意されていなければならない。

それまで辞書を引きながら英文を訳すということをしてきた学生の読み方の習慣を崩すことは、そう容易なことではない。多読指導において大事なことは、多読の価値を学生に納得させ、個別のカウンセリングを行うことによって多読の読み方を徹底させることである。その読み方の重要な点は、

- ・辞書を使わずに中断せずに読む。
- ・未知の単語や分からない箇所は、推測するか、無視する。
- ・文の順番に読む。（訳さない）
- ・物語の筋や全体的な意味内容に集中する。
- ・完全に分からなくてもよしとする。
- ・好きでない本は、我慢せず、途中で読むのをやめる。

教師は、黙読する学生一人一人の読み方を観察し、助言、援助、矯正を行う。また、教師が学生とともに多読プログラムに参加し、読書を楽しむことも、学生にとってよい刺激になると証言しているリーディング教師もいる。また、読みの早い学生が読みの遅い学生をサポートする機会を与える。

読んだ後に行うポスト・リーディングの活動については、語彙の練習や物語の細かい出来事についての問いなど、読んだことを覚えなければならないような問いは避け、学習者が読み物に対して持つ個人的反応を引き出すこと、すなわち、自分の意見や気持ち、読みから得たものは何かを表現する機会を与えることが最良と考えられる。学習者がリアクション・レポートを書いたり、それを口頭で発表したりすることによって、学生同士、教師との間にコミュニケーションが生まれる。

多読をカリキュラムに入れる場合に問題となってくるのは、学生の評価である。一般的に行われているのは、まず、クラスのレベルによって、学生に読書達成目標（本の数やページ数、読書時間など）を設定し、それを基準に、読んだ本と提出したレポートによって評価を与えるものである。単位に必要な最低限を設定し、それを超えて行われた読書にたいして高い点数を与えるという方法もある。しかし、違うレベルの学生がそれぞれ自分のペースで楽しく読書を行うことが奨励されているわけであるから、教師は、紋切型ではない、よりきめ細かい指導と評価を行うことが求められる。

教師が学生の読書経験に積極的に参加し、関係を築く中で、様々な考えについてディスカッションしたり、学生が興味を持ちそうな本を紹介したりなど、想像力豊かに活動することが理想であ

る。このようなリーディング・クラスをリチャード・デイは、「リーディング・コミュニティ」と呼ぶ。最後に、彼がこのコミュニティの活動の効果を評価するものとして挙げた以下のチェック項目に注目してみたい。

- ・読むことを学生の人生や経験に関連づけているか。
- ・学生が自立した読者になる助けとなっているか。
- ・読者がほかの読者を支え、支えられることを可能にしているか。

これらの問いは、学問研究そのものに通じる問いである。英語の多読指導によって、英語力を向上させるだけでなく、学問研究への足がかりとすることができるとすれば、大学では、より積極的に多読指導を取り入れた英語教育を行う価値があるのではないかと思われる。

参考文献

- Day, Richard R. and Bamford, Julian. *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge University Press, 1998.
- Hill, D. R. *The EPER guide to organizing programmes of extensive reading*. Edinburgh: Institute for Applied Language Studies, University of Edinburgh, 1992.
- 酒井邦秀『快読100万語！ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫、2002年。
- ロンブ・カトー、米原万理訳『わたしの外国語学習法』ちくま学芸文庫、2000年。
- 渡辺時夫編著『新しい読みの指導』三省堂、1996年。

（しまだ・けいこ 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学博士後期課程修了）